

「尾流雲」の由来を知る吉武素二元気象庁長官からの手紙

天気41巻9号(1994年9月)のカラーページ「尾流雲と乳房雲」に関連して、気象庁の大先輩になる吉武素二元長官から「尾流雲」の由来を知る手紙を頂いた。大変興味深く思ったので、吉武さんの許可を得てその手紙を紹介する(原文のまま)。今日の気象業務が多岐の方々の努力の上に成り立っていることを、改めて感じている。

秋酣の候となりました。

「天気」9月号に掲載された尾流雲の写真を拝見し、美しさのあまり筆をとりました。終戦直後のことですが、小生は測候課長をしていて地上気象観測法が時代遅れになっていて早急に改訂する必要にせまられていました。そのためには先ず日本語訳のなされていなかった

International Atlas of Clouds and of States of the Sky

を翻訳することでした。戦時中に陸軍気象部で訳したものがあると聞き、やっと一部手に入れ中味をみましたが、誤訳だらけで役には立ちませんでした。

訳しているうちに Virga の訳語が欲しくなり思案

していました。たまたま白水社の月刊誌「ふらんす」に矢野健太郎氏がフランス語の翻訳について寄書されてきました。Maupassant の長編小説「女の一生」の原語は Une Vie. これを直訳すれば「ある一生」、それを「女の一生」と訳すのは名訳中の名訳との記事を読みました。Vie が女性名詞だから Un でなく Une なわけで題そのものには女気はないのに、小説の内容から云えば確かに女の一生そのものです。

Virga にも何とかうまい訳はと思案したあげくビルガ→ピリュウ→尾流雲と連想したわけです。観測法改訂委員会にはかり認められたので、地上気象観測法、昭和25年1月(暫定版)に初めて載ったわけです。

尾流雲はその後一般に使われることのない訳語でした。誕生してから四十数年後にやっと、貴方のおかげで美しい写真とともに日の目を見たような思いがします。昔のことを思い出し、ついこんな経緯もあったことを申述べました。

10月15日

吉武素二

(気象研究所 水野 量)